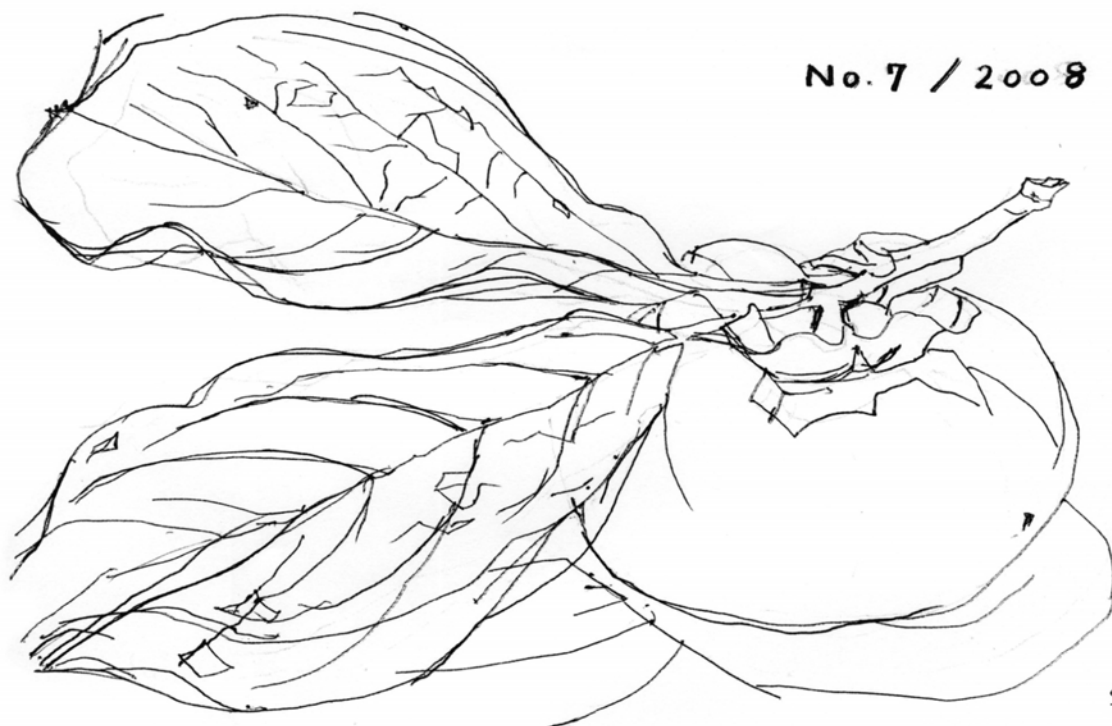


登録有形文化財

畑田家住宅活用保存会年報



No. 7 / 2008

柿 (庭の植物39-23)

<今年度の行事予定>

- | | |
|------------------------|--------------------------------|
| 春の一般公開と音楽フォーラム | 2008年3月16日 |
| 野津臣貴博・吉山輝デュオリサイタル | フルート 野津臣貴博 ピアノ 吉山輝 |
| 第10回畑田塾 | 2008年5月25日 |
| 大工さんの技に学ぶ | 羽曳野市役所維持管理課 畠中政信 |
| ロボットと仲良しになろう | 大阪大学大学院工学研究科 知能・機能創成工学専攻教授 浅田稔 |
| 秋の一般公開と社会フォーラム | 2008年11月16日 |
| 少子化をめぐる話題-将来の社会と医療を考える | 大阪大学名誉教授 岡田 伸太郎 |
| 第11回畑田塾 | 2009年3月23日 |
| 畑田家住宅で絵を描いてみよう | 宝塚造形芸術大学教授、新制作協会会員 中村貞夫 |
| インターネットを正しく使うには | 大阪大学名誉教授、前大阪大学総長 宮原秀夫 |

畑田 勇

人類の諸活動における科学の進歩発達はすばらしいものがある。いまや日進月歩の領域を乗り越えて、秒進分歩の勢いが感じられる。

レントゲン装置の発明により、医療技術の進歩はものすごく、様々な病気の根源に迫り、我々人類の受ける恩恵は極めて大なるものがある。これらの発展に伴い、基礎医学の研究も活発となってきた。特に、遺伝子の解明により人間そのものの解明が、最先端医学として脚光を浴びる今日となった。京都大学中山教授の「万能細胞」の研究は、世界の医学界に大なる奮起を促す発表となった。今後の進展が、尚一層期待されるところである。

一方、子供の遊びも、科学・技術の発達により、環境条件とも相まって、近世代においては、全く様変わりを起こすことになってきた。将棋、碁石並べ、独楽回しなどはいつの間にか関心が薄れ、テレビマンガ、ゲーム遊びには大多数の子供達が男も女もこぞって熱中する今日となった。コマが倒れないように高く積み上げたり、山積みされたコマから、音を立てないで一個ずつぬきとる遊びなど、息を抑えてする室内遊びや、コマを廻して走り回る戸外の鬼ごっこ、工事現場で叱られても面白いトロッコ遊び等懐かしい思い出として、私の脳裏に深く刻み込まれている。

マンガを読む楽しみは、昔より今のほうが盛んなようである。世界中の老若男女が、日本のマンガを楽しんでいるとは、なかなか面白い話である。

新正会員

金谷久子	神野武男	喜田一也
木村千代子	工藤真由美	久保洋子
佐々木順司	佐藤美代子	高橋雅子
寺西興一	仲田 昇	藤尾好春
松尾靖子	村司辰郎	山口 兆
山村一馬		

新特別会員

高橋憲明	西垣敬子	西田正吾
------	------	------

1. 春の一般公開と健康フォーラム
3月18日
「脂肪の種類と心・体の健康」
大阪大学教授 杉田義郎
2. 音楽フォーラム
4月22日
「オルゴールを楽しむ集い シリンダーオルゴールから手廻しパイプオルガンまで」
畑田家当主・大阪大学名誉教授 畑田耕一
3. 第9回畑田塾
5月13日
「アフガニスタンの子どもたち」
宝塚・アフガニスタン
友好協会代表 西垣敬子
「仕組みがわかると技術が作れる
立体視を例に」
大阪大学教授 西田正吾
4. 秋の一般公開と音のフォーラム
11月18日
「日本建築と音の響き」
大阪科学館長・大阪大学名誉教授 高橋憲明
関西二期会 ソプラノ 畑田弘美
5. 畑田家住宅見学会
11月12日
羽曳野市立丹比小学校4年生
6. 出版
「[哲学は面白い、哲学を楽しもう](#)」
大阪大学教授・総長 鷲田清一



丹比小学校4年生来訪

初等・中等教育における学校、家庭、地域社会の役割

緒方淳子、尾野光夫、川崎 徹、木村千代子、三軒 齊、渋谷 亘、高杉英一、竹下哲生、中林邦夫、畑田耕一、林 幸子、林 義久、藤田博誠、古城紀雄（あいうえお順）

1. はじめに

学校教育の根本は、知識を教え、それを応用させるだけでなく、その背景にある物事の本質を考えさせることである。学校から家に帰った子供が、学校で学んだことを生かして体験的に考え、行動を起こすことによって、学びの成果を挙げることが出来るかどうかは、家庭の教育力にかかっている。家族が子供に及ぼす教育上の影響は非常に大きい。国民全員が生涯学習を心がけ、家庭の文化的環境を良くし、教育力を高めることが、ひいては地域の文化・教育力を高め、子供に生きる力を養わせることになる。

近年、社会の仕組みや人々の生活様式が次第に多様、複雑に変化し、その影響で価値観もまた多様化した。子供や保護者、地域社会の環境も例に漏れない。それに伴って、学校にも多様な価値観が集まり、これまでの単一の目標のもとでの画一的な教育は成り立たなくなった。同時に子供たちの中では戸惑いや混乱に起因した無気力さが生じているようにも思われる。現に、日本で子供たちと身近に接している留学生から見ると、日本の小・中学生は生き生きとして夢を持っているとは思えないようにうつろいという。教育の世界でも、個性化とそれに伴う多様化が求められている。このような状況にあって、学校、家庭、地域社会に課せられた役割とはどのようなものであろうか。

本稿は、小学校から大学までの教職員と管理職、教育行政担当者、臨床心理士など上記のパネラー14名が大阪府羽曳野市の畑田家住宅に会し、一般参加者も含めて、初等・中等教育における学校、家庭、地域社会の役割について議論を重ねた結果をまとめたものである。パネラーの所属は文末に記した。

2. 教員の役割

教員には高い倫理観と使命感が求められる。教員は子供にどのような教育をして、どのような人間に育てたいかという目標（教育観）を明確に持たねばならない。「いい子を育てよう、いい教育をしよう」という志が大切である。自分の授業や言動を常に見直し、自らを改善できる力が必要である。子どもは、大人以上に人の役に立ちたいという思いを抱いていて、そういう人に会うと感激する。教師がそのような子供たちの尊敬の対象となり、子供たちのロールモデル（role model）になるよう、常に学びの姿勢を崩さず自己研鑽に努め、自身の全人格の育成をしなければならない。

教員が生きることの面白さ、自分の専門の面白さを伝えることは非常に大事である。子供が自分の先生を尊敬し、あの先生のような人になりたいと思うことは、子供の人格形成に大きな影響を与える。とりわけ小学校において、子供たちが「あの先生みたいになりたい」と思えるような教員と出会うことの意義は深い。教員もこのことをよく理解して、「あの先生の言われることは何でも聞きなさい」と保護者や地域から言われるような力を身につけなければならない。

さらに子供たちに対してだけでなく、地域社会においてもロールモデルになるだけの力をつけねばならない。この力は単なるペーパーテストでは推し量ることの出来ない生きる力、人間力につながるものである。この生きる力、人間力こそが、生徒に転写されねばならない重要な力のひとつである。この様な教師を育成していくためには、家庭の協力も欠かせない。

従来は、ごく自然に行われていた教員相互の研鑽による授業力の向上が、今は難しくなっている。授業以外の様々な事務的業務や、本来家庭が行うべき基本的なしつけなどの生活支援的業務の発生が、先生の授業に向けるエネルギーを削ぐ事態になっていることが一因である。また、教員の年齢構成がアンバランスになっていることも、教員の相互研鑽を行い難くしている。退職教員の再出馬による現職教員の指導という方法も考えられる。教員免許の更新制度を教員リフレッシュ教育に生かすのも一法である。まかり間違えても、免許更新制度が、教員免許は10年で消える可能性がある魅力の無い免許というような誤解を若者に招き、教員の質の低下に繋がるようなことがあってはならない。

先にも述べたように、教員は、高い倫理観と使命感を持ち、常に学習に努めて教育力を高め、自己成長を続けなければならない。教員の採用に当たっては、そのようなことの出来る資質を備えた人材を教壇に送る努力と工夫が必要である。その一方で、このようなことのできない教員を排除することも必要である。その場合、排除された教員には他の適切な仕事を与える必要がある。そのためにも管理職となる人間の資質は重要である。

そして、定員増と給与の増額も含めて教員の待遇をよくし、優秀な人材を集めることの出来る制度を構築することも必須といえよう。教員にも時間のゆとりを十分に与えて、子供と接することの出来る時間と自己研鑽の時間を保障するべきである。

3. 学校の役割

小学校、中学校、高等学校には、それぞれの発達段階に応じた教育のあり方や役割がある。小学校では、社会性を身につけるために、学校を挙げて、命の大切さを実感できる心地よい学級を作り、自分の考えを適切に表現する能力を身につけるとともに、他人をよく理解する努力のできる子どもを育てることが必要である。この時期の子供の教育に重要な課題は、勤勉性を基本として自発性を育てることである。それによって、子供達は、友達同士の喧嘩なども含むさまざまな体験を通して、いろいろなことを行う自信を深めていくことができる。これらの過程で、学校と家庭・地域の間に十分な支援・協力関係の出来ていることは不可欠である。このような小学校での経験は、中学校時代から20代にかけて成熟してゆき、アイデンティティの確立に繋がっていくことになる。

最近の生徒は、いわゆる「読み書きそろばん」の力が落ちていくように感じられる。世の中はずいぶん便利になり、漢字を知らなくてもワープロで文章が作れるし、電卓のキーボードを叩くだけで、かなり難しい計算でも答えが出る。簡単な英文なら日本語をキーボードに打ち込むだけで作成することも可能である。基礎的学習を積む前にこのような技術に慣れてしまうと、基礎的能力の不十分なまま成人するということになりかねない。一方、昨今は、ゆとり教育、総合的な学習、教科内容削減の見直しなど、教育政策がめまぐるしく変化し、巷では、さまざまな議論や論争が行われている。ただ、ここで、学校教育の問題を制度の欠陥と学校・教員の教育能力のみに帰するのではなく、教育を市民全員の責務と捉えて問題の解決を図ろうとするのが、民主主義社会に生きるものの使命であることを強調しておきたい。学校・教員だけに要求をして自らは何もしないのでは、問題の解決にならない。具体的には、学校、教員、保護者が一緒になって、子供の教育をするうえで「教える」と「学ばせる」との両立とそのバランスを常に心がけねばならない。教えすぎず、また、学ばせようとするあまり教え足らずにならないようにすることが肝要である。

いろいろな教科の中で、日本語の教育はすべてに優先する。これは、文科系、社会科学系を目指す者のみならず、自然科学系の進路希望者にも、あまねく当てはまることである。小学校での国語教育の時間はもっと増やすべきである。日本語の基礎をしっかりと学習したうえで、論理的思考力と表現力を身につけさせることが必要であろう。小学生も高学年になれば、たとえ、算数の解答であろうとも、数字や式のための羅列ではいけないことをしっかりと理解させておく必要がある。

小学校低学年では、基礎をしっかりと叩き込まねばならない。それは「読み書きそろばん」の基礎、あいさつの習慣、宿題をきっちりする習慣、運動場や教室で友達と一緒に遊べることである。これらをきっちり出来るようにしたうえで、高学年では日常生活の中から教材を選び、学びの「楽しみ」を伝えていけばよい。それぞれの教科の特性を生かして、その授業を通して教えることのできる物事の根本原理と結果とともに、それに至るプロセスを理解させれば、子供たちの学習への興味・関心を強め、学習意欲を高めることができる。その結果、自ら自発的に学ぶ力が醸成される。この段階では、「総合的な学習」が大いに役立つはずであるし、それによって、子供は自発的に物事を行うことへの自信を持つことが出来る。

一方、前述のように、社会の仕組みや人々の生活様式が多様、複雑化し、その変化のスピードには目を見張るものがある。教育の世界でも、物事を多面的に見て、現在の社会の情勢に対応できるように教育の内容や方法を改めなければならない。過去の成功体験に基づいた旧態依然としたやり方では、通用しなくなっている部分も多い。教育において、何を变えねばならないのか、何は変えずに守り通さねばならないのかを、学校はしっかりと考えて、社会に対して明確に発信することが必要である。

学問領域の面白さや夢を子供たちに伝えるためには、それを心の底から面白いと思う人が教えなければならない。誰でも、自分がよく知らないことについて、その面白さを語るのには容易ではない。したがって、小学校でも高学年では専科教員制の導入が望まれる。予算や定員の問題でそれが不可能な場合は、当面、教員同士の授業交換でしのいでいく方法も考えられる。一方、教育大学の小学校教員の養成課程で、卒業研究の専門分野だけでなく、小学校の教師として必要な他のいろいろな分野の基礎的な素養を身に付けさせる努力がもう少し必要なのではないかと思われる。

最近の社会問題として、身体的、心理的、または性的な虐待や養育放棄があり、児童相談所への虐待通告は年々増加している。不登校、いじめ、学級の荒れなど、他にも懸念される問題が少なくない。これらは子ども

たちを取り巻く環境が安心して学べる環境でなくなっていることを示しているといえる。子供たちがいつ、攻撃的になったり、過度に甘えたり、無力感、情緒的不安定になっても不思議でない状況である。

重要なことは、子どもたちの様子の変化を的確に受け取り、未然に対処する働きかけである。その際、忘れてならないことは、どのような言動や振る舞いをする子供たちでも、健康な部分を根底に持っていることを信じて、表面的な行動の規制に終わらないことである。指導する担任教員の負担が極めて大きいことは確かであるが、子供たちの可能性をどこまでも信じ、粘り強く指導していくことが最も大切であると思われる。あらゆる機会を通じて、すべての子供たちの可能性を育むような働きかけを日常的に進めることが指導の根本である。子どもたちを表面的にとらえて「問題のある子」と思うのではなく、「この子どもたちも問題を抱えて困っているのだ」と受け止めて内面理解に努める視点をすべての指導者が共有することが重要である。

少し観点は変わるが、昔は、学校も子供の住む家も伝統的な木造住宅であった。このような建築には、わが国古来の文化伝統を伝えるさまざまな先人の工夫や心が一杯詰まっていた。子供はその旺盛な好奇心と想像力を駆使して、感覚的に伝統・文化・風習を学び取ることが出来たし、また、それを通して自らの想像力を磨き、創造力の養成に繋ぐことも可能であった。今は、学校の建物は殆どが鉄筋コンクリートの建物であり、子供たちの家も伝統的な木造住宅であることは少ない。日常生活の中で、建物の持つ潜在的な教育力が子供に影響する機会は、殆ど失われてしまったともいえる。このような視点から住宅を見つめなおし、建物の持つ潜在的な教育力、すなわち、「住育」の力を子供の教育に生かす方策を考えてみてはいかがであろうか(1)。また、さまざまな先人の心が詰まっている建物を後世に残すということも大切な教育活動である。日本古来の文化伝統の継承を通して、文化や伝統を大切にすることを育めることは、道徳教育の根幹と考えられるからである(2)。

4. 家庭の役割

家庭、学校、地域社会のうち、とりわけ学校と家庭の関係が良くないと、子供に悪影響の出ることがある。例えば、母親が家庭で担任の先生の悪口を言うようなことがあると、子供は先生を尊敬しなくなる。これでは、結局、子供がだめになってしまうだけである。また、若い母親たちの中には、自分の子供が担任教員に指導されると、まるで自分が担任に注意されたような気分になってしまうものもいるという。世の中の先輩に当たる親などが支援をして、このような母親の不安を解消するようなシステムを地域社会に作っておく必要がある。

また、現在は、家庭と学校が自分の子供だけで繋がっていて、教育が損得勘定やお金を払って物を買うような感覚で判断されることがある。学校はお金を払って教育を買うところというような考えだけで結ばれた関係を作ってしまう、さまざまな教育の問題点は「先生のせいだ」と済ませているようでは大変困る。参観日や面談、学校行事などへの参加は、商店で買い物をしたり商談をしたりするのは根本的に異なる。

子供は学校、家庭、地域社会の中で学び、育っていく。健全な子供の育成には、とりわけ、家庭環境が重要である。小学校高学年のときの家庭の文化的環境が、その子供の将来を決めるという調査結果もある(3)。親の再教育、生涯教育が必要である。保護者を含む市民全体が一所懸命生涯学習に励んで居れば、子供もまた勉強に精を出す筈である。同様なことは子供の礼儀作法についてもいえる。大人の社会が礼儀正しいものであれば、子供も自発的に礼儀作法を身に付けていく。食事の時にはテレビを消す、朝食をとってから登校する、いつもTシャツやトレーナーではなくその場に適切な服装を整えるなど、住育のみならず衣育、食育について、具体的な方策をもって教員と保護者の集まりであるPTAが対応してはいかがであろうか。親の再教育という視点に立った教育、いわゆる「親学」の構築を考えるのも一法である。

5. 地域社会の役割

教育の根本的な目的は文化の伝承である。日本古来の文化・伝統の継承を通して、日本人の「心」を大切に育めることは重要である。したがって、前にも述べたとおり、「人の心」が通った古い伝統的な建物を保存し、活用・継承していくことも、大切な教育の一つであり、地域社会が果たすべき大事な役割であろう。祖父母をはじめとする高齢者の豊かな経験や知恵を子供たちに伝えることも、子供たちの情緒を育み道徳的能力を向上させるのに重要であり、文化・伝統の継承に不可欠である。子供たちが人生の先輩の言葉に畏敬の念を持って接し、高齢者もまた長い人生を生き抜いてきたその貴重な経験を後輩たちに伝えることを責務と考えて努力できるような環境の構築が必要である。

市民の一人ひとりが、子供の人格の完成、とりわけ小学校高学年の生徒の教育を担っていくことこそ自分の仕事であるとの使命感を持つ事が大事である。子供が自ら学習意欲を高め道徳の心を養うには、市民の高い学習意欲と品性が必要である。

数学には数学の美しさが、国語には国語の美しさがある。このような専門分野の美しさを、授業を通して感

じ取れる子供を育てたいと思う。その成果は「勉強そのものに価値がある」という教育本来の意義をよく認識した市民に満ちた社会の育成につながる筈である。

最近「パフォーマンスの時代」になっていて、華々しく目立つ物が評価されるような空気が漂っている。マスメディアが取り上げるのは、極端に立派な場合や極端に不真面目な場合が多く、誠実にこつこつ努力する地味・地道な姿勢は脚光を浴びにくい。その結果、真面目に頑張っている子供たちに世間が目を向けない風潮があり、子供どうしの中でも人気がないようである。ニュースとしての価値から判断すると、ある程度はやむを得ないことかもしれないが、これでは、子供たちが地に足つけて真面目に行動することを良しとしない風潮を生む可能性がある。テレビや新聞の紙面から伝わってくるニュースには、子どもたちが喜び、希望を抱くような記事は少なく、不祥事で企業のトップが頭を下げるような場面がよく目立つ。マスコミはこれを批判にさらし、頭を下げる場面ばかりを論じて、事に対する本質的な議論にあまり多くの時間・紙面を割いていないように思われる。これでは本当に成熟した社会であるといえるかどうか疑問である。市民に真面目に頑張ることの重要性を伝え、真面目に頑張る者が評価される社会を作らねばならない。

教育とは「共育」であり「協育」である。特に、初等・中等教育では、住民の「おらが学校」の意識が大切である。地域は、学校と関わるときに「お客さん」の発想から脱却しなければならない。住民一人ひとりの地域の学校に対する意識が高まれば、学校が活性化し、教育の効果が高揚する。これは、また地域が育つことにもつながる。地域が成長すれば教育は良くなる。この相乗効果は大きい。子供の学習意欲を高め、生きるための作法を養わせて道徳的能力の開発につなぐことも、学校と家庭・地域社会との車の両輪のような連携によって、大きく促進されるものである。

このような地域の支援のもとに、意欲と誇りをもって、その学校像を主体的に確立することが学校の責務である。学校教職員、保護者、地域住民のいずれもが、学校は税金で運営されていることをしっかりと認識し、学校・家庭・地域が共有できる道徳をもって行動する必要がある。単なる消費者主義のみで行動していると自滅するだけである。その意味では、小学校から学校選択制が敷かれることの功罪を、地域社会の住民は、自分の子供のことでなく、広い立場から真剣に議論する必要がある。

最後に、マスコミが教育問題解決の強力な支援者となるために、その在り方を真剣に議論することも、生涯学習の意欲に満ちた真に成熟した民主主義社会においてのみ可能であることを強調しておきたい。

6. これからの教育への提言

上記の内容をもとに、教員、学校、家庭、地域社会への提言を以下にまとめる。

教員への提言

教員には高い倫理観と使命感が求められる。児童生徒に対してのみならず、地域社会においても尊敬されるロールモデル (role model) であり得るように、常に学ぶ姿勢を崩さず、研究と修養に努め、全人格 (人間力) の涵養に努めなければならない。

従来は、ごく自然に行われていた教員相互の研鑽による授業力の向上が、教職員の年齢構成がいびつになっている現状では難しくなった。退職教員の再出馬による現職教員の指導や、教員免許の更新制度の利用などによるリフレッシュ教育の機会を増やす必要がある。

自治体は、職員の定員増と給与の増額も含めて教員の待遇をよくし、優秀な人材を集めることの出来る制度を構築し、さらに、教員が子供と接することの出来る時間、および自己研鑽の時間が保障された環境の整備に尽力すべきである。

日本語教育はすべての学問に優先することを各教科の教員は意識し、あらゆる教育の機会を捉えて、日本語の素養を身に付けさせるよう図るべきである。

学校への提言

小学校では、社会性を育てるために、命の大切さを実感できる居心地のよい学級を作り、自分の考えを適切に表現する能力を身につけるとともに、他人をよく理解する努力のできる子どもを育てることが必要である。この時期の子供の教育に重要な課題は、勤勉性を基本として自発性を育てることである。そのためにも、学校と家庭・地域の間にも子供の教育についての十分な支援・協力関係が出来ていることが必要である。新たな視点に立った PTA 組織の更なる活用が望まれる。そして、「何を変えねばならないのか、何を変えずに守り通すべきか」を明確にすることが必要であり、また大切である。

小学校低学年では親や家庭と協力して道徳観を育み、基礎となる読み書きそろばん、宿題をやりおおせる習慣などをしっかりと叩き込み、高学年では専科教員制を導入して、子どもの旺盛な好奇心に応える必要がある。

専科教員制の導入が難しい場合は、教員同士の授業交換による補完も考えられる。

教育大学の小学校教員の養成課程では、卒業研究対象の専門分野だけでなく、小学校の教員として必要な他のいろいろな分野の基礎的な素養も学ばせる努力が必要となろう。

衣育、食育、住育の重要性に関心を払うべきである。例えば、地域社会の積極的な協力の下で、「人の心」がすみずみまで通う、永い歳月を経た歴史的な建物などを、地域社会の支援・協力を得て保存し、伝統的な建造物が持つ潜在的な教育力、すなわち、住育の力を活用・伝承して子供の教育に活かすように努める。このような視点から校舎建築を見直す必要がある。

家庭への提言

命の大切さを実感して互いが協力し合い、明るく元気に生きる基は、家庭における親の愛情にあることに異論はないであろう。他人を理解することの大切さも含めて、まず大人や保護者が姿勢を正す必要がある。そして親には、一所懸命生涯学習に励み、子どもの手本となる意欲がほしい。

祖父母をはじめとする高齢者は、その豊かな経験を子どもたちに伝えて情緒を育み、道徳的能力を向上させるとともに、文化・伝統の継承に貢献することを自己の使命と考え努力してほしい。また、子どもたちが人生の先輩の言葉に畏敬の念を持って耳を傾けることの出来る環境づくりにも貢献いただきたい。

常に、学校と家庭の良好な関係を保つ努力が欲しい。母親が家庭内で担任の先生の悪口を言うようなことがあってはならない。

かりにも、学校はお金を払って教育を買うところというような、損得勘定だけで学校と家庭とを結ぶ誤った考え方や関係を生じさせてはならない。

子育てのための親の再教育という視点に立った教育、いわゆる「親学（おやがく）」の構築を具体的に考える必要がある。

地域社会への提言

地域社会は、勉強することそのものに価値があるという教育本来の意義をよく理解し、学校教育を支援してほしい。

地域は、学校と関わるときに「お客さん」の立場という発想から脱却し、「おらが学校」の意識を持って主体的に協力すべきである。若い母親が独りで子育てをしている場合など、世の中の先輩に当たる親などが支援出来るようなシステムを地域社会に作っておくことも必要ではなかろうか。

学校教育の問題を制度の欠陥と学校・教員の教育能力のみに帰するのではなく、教育を市民全員の責務と捉えて問題の解決を図ろうとすることが、民主主義社会に生きるものの使命であることを心に留めるべきである。

マスコミの在り方を真剣に議論し、成熟した民主主義社会における教育問題解決の強力な支援者となる構図を創出したい。

7. 参考文献

- 1) 畑田耕一、林義久、伝統的木造住宅の住育の力と歴史的建造物の保存継承、
- 2) 文部省、「小学校 文化や伝統を大切に育てる」道徳教育推進指導資料（指導の手引き7）
平成11年
- 3) 朝日新聞 2002、2、20 朝刊掲載の東京大学の荻谷剛彦教授による調査結果についての記事による

本稿は、2007年7月22日、大阪府羽曳野市の国登録有形文化財畑田家住宅で畑田家住宅活用保存会主催、大阪大学総合学術博物館協賛のもとで開催されたフォーラム「教育における学校、家庭、地域社会の役割」における、下記のパネラーのすべてと若干の一般参加者の発言をもとに、兵庫県立豊岡高等学校教諭渋谷巨、畑田家住宅活用保存会幹事矢野富美子、大阪大学名誉教授畑田耕一が編集したものに、当日のパネラーが加筆して作成されたものである。パネラーの所属あるいは職業を氏名とともに次に記す。元大阪府立大手前高等学校長緒方淳子、四天王寺学園高等学校教諭尾野光夫、羽曳野市教育委員会参事川崎徹、八尾ニューモラル生涯学習クラブ木村千代子、姫路工業大学名誉教授三軒齊、兵庫県立豊岡高等学校教諭渋谷巨、大阪大学理学部教授・大学教育実践センター長高杉英一、大阪市立長吉小学校教諭竹下哲生、臨床心理士中林邦夫、大阪市立池島小学校教諭林幸子、大阪府教育委員会文化財保護課主査林義久、羽曳野市教育長藤田博誠、大阪大学教授・留学生センター長古城紀雄。司会は畑田耕一が担当した。

本年の行事に参加していただいた方々からの感想文 脂肪の摂取と心・体の健康（2007年3月18日）

3月の春の日差しを感じる日の午後、大阪大学の杉田教授による「脂肪の摂取と心・体の健康」をお聞きしました。たくさん種類の脂肪酸の名前に圧倒されて頭の中が混乱しそうですが、杉田先生と畑田先生で所々簡潔にまとめていただきながら、理解して拝聴できました。

この講演を聴き、今までの脂肪に対する常識が変わりました。たとえば、リノール酸過多の油脂を摂取している今の食生活、必須脂肪酸のn-6系とn-3系の違いと取り方や水素添加という加工でトランス型の脂肪に変化しているマーガリンの人体への影響などに驚きました。また、HDLコレステロール値が低いということだけでは健康につながらないことに生命のバランスの難しさを感じました。

講演の後、質問も多く出ました。その中の一つに「食育」がありました。今一番ホットな話題かもしれません。子どもたちの食生活がもたらす心・体への影響です。栄養学的な面、精神医学的な面などいろいろなところでこの問題が取り上げられています。その食生活の一つに「孤食と個食」があります。これらが私たちの毎日の食生活に知らず知らずのうちに忍び込んでいます。忙しい生活時間の中、家族と一緒に食卓を囲む機会が減り、家の中で一人きりで食べたり、家族が居るのに一人で食べるという「孤食」も多くなっています。休日などは家族がそろるので外食することが多くなり、家族一人ひとりが好きなものを食べるという「個食」が生まれやすくなっています。家での食事でも昔は出されたものを食べるしかなかったのですが、今は、コンビニなどで簡単に好きなものを買えるため、やはり「個食」が増えてきているようです。

このような食生活の変化は、経済的に豊かになった結果、大人の生活が変化したことによるのだと思います。ニュースでおせち料理の注文数が急上昇していると報道されていました。また、お正月は家で過ごさずに旅行かホテルで過ごすという話もあります。家で過ごすことや料理することが次第に減ると、素材の食品や調理の手順を見聞きすることもなくなります。小さいときによく食べていたものがおふくろの味になるように思います。ファーストフードをよく食べているとそれがおふくろの味になるのかも知れません。大人である私たちが「食育」をもう一度受けなければならないと思います。私自身も、ついお総菜屋さんで夕食の足しに何かを買ってしまいます。出来るだけ昔ながらの食事を大切にしなければと考えています。（放送大学生 白木和子）

興味深く、聴かせていただきました。心と体の健康には脂肪酸の - 6 と - 3 のバランスが大事であること、食の欧米化はよくないこと、粗食が日本人には適していることなど、先生の結論にはなるほどと感銘を受けました。また、主婦の方々の出席も多く、質疑応答も活発で、弁当にかかわる教育論まであり、非常に有意義でした。（ダイソー 藤尾好春）

日頃直接口に入れる食べ物の話で関心があり参加しました。外食や出来合いの料理を食べる機会が多くなり、家庭で妻が作る料理とあわせて考えさせられる内容でした。 - 3 系と

か - 6 系とか聞きなれない専門用語が出てくると、司会者の当意即妙の才たけた質問とそれに対する回答で、内容がすっきり整理され、最後まで理解しやすいお話でした。また、質問者の熱のこもった発言から、身近な食と健康の問題への関心の高さを改めて知るとともに、畳に座っての質疑応答は自由な発言が、活発に出て、日本家屋の持つ独特の雰囲気、日本の文化を感じました。3時間があったという間に過ぎた一日でした。（八尾ニューモラル生涯学習クラブ 白井彬裕）

杉田先生の脂肪に関するお話をお聞きしながら、ジョンフィネガン著「危険な油が病気を起こしている」を思い出しました。私は日頃から - 3 をとるように心がけていましたが、今回 - 6 の摂取量が非常に多いことに気づかされました。

研究がどんどん進んでいるのに対して自分の知識が古いままであることが分かり、人は常に学習が必要であること、生涯学習の大切さを改めてと痛感しました。

（八尾ニューモラル生涯学習クラブ 山野裕史、神野和子）
家では、健康のためと脂ものや天ぷらなどを極力避けた野菜中心の食事、少し物足りなさを感じていましたが、キレイな健康な心と脳を育てるのに何が大切か、日頃のバランスのよい食事や睡眠が、子供の教育や精神衛生にも重要な要素となっていることを知り、改めて、家族の健康を考えた妻の姿勢や気持ちに感謝を覚えた次第です。また、自分自身も残された余命を大切に家族に極力迷惑をかけないようにしたいと思いました。さらに、畑田先生の教育問題についての話題の中にもあった、次の世代に住みよき明るい未来のある日本であり続けるためにも、親としての責任を果たすべき行動が大切であると改めて自覚した次第です。

（八尾ニューモラル生涯学習クラブ 木下文彦）
お話を聞いてから、油にとっても関心を持つようになりました。しっかり魚を食べよう心がけたいと思います。当日私の心に強く残ったのは、縁側に座っておられた老紳士のお話です。杉田教授のお話に敬意を払った後、先祖が食べてきた粗食にこそ健康の本当の源があるのではないかと言われました。健康になるために、「何を食べよう」の発想ではなく粗食（腹8分目）をいかに楽しめるかが大切なのだと思います。

話は変わりますが一度畑田家で少しお酒でも頂きながら人生、世界、すべてについて自由討論が出来れば面白いな一と思いました。毎回深い感動を味わいます。ありがとうございました。（八尾ニューモラル生涯学習クラブ 神野武男）

皆様とともに一所懸命勉強させていただきました。大変活発に多くの質問も出て、自由な雰囲気でもものの言える楽しいフォーラムでした。また、私が一番に思ったことは、会の始まる30分前ぐらいから庭の草引きなどをしたらどんなによいかということです。文化財の保存は皆の協力が無いとできません。自分たちで文化財を守っていく努力が必要だと、お話を聞いて思いました。（羽曳野市野々上 金谷久子）

オルゴールを楽しむ集い（2007年4月22日）

新緑が小雨にぬれ、きらきらと美しい光を放つ日曜日の午後のひととき、雨あがりのさわやかな空気がただよう畑田家住宅は、小学生から老人まで年齢に関係なく、熱心なオルゴ

ールファンや音楽ファンでほぼ埋め尽くされた。

畑田家の当主、大阪大学名誉教授の畑田先生が自ら解説と進行役をつとめられた。先生はオルゴールについて大変ご造詣が深く、またオルゴールの熱心な収集家でもある。当家に伝わるオルゴール(先生のご母堂が聞いておられたもの)をはじめ、先生ご自身が集められたスイス・リュージュ社製などの数々の逸品を丁寧に紹介され、オルゴールの演奏するベートーベンの「トルコ行進曲」をはじめ、私たちの気持ちの和む美しい調べを披露された。

オルゴールは自動演奏楽器の先駆けとなる楽器であり、18世紀末のスイスの時計技術者ファープルによるシリンダー型オルゴールの発明に始ると言われており、後にディスク型オルゴール等も出現した。オルゴールは発明されて以降 200年余りの長い歴史をもっており、世界中の人々からこよなく愛されつつ今日に至っている。鋼鉄で作られた櫛歯を弾いて出される金属音が、オルゴールの木の箱で共鳴して独特の美しい音色をつくり出し、聴く人の心に染み入るように響くところに、オルゴールの深い魅力の源があるように思える。

畑田家住宅で私たちが聴いた音は、単にオルゴールから直接発せられた音のみではない。その音が同家の木造りの部屋のあらゆる部分と絡み合っただけで丸みを帯びた反射音に変わり、オルゴール自体の音とまじり合い豊かな音になって部屋中に満ち満ちたのである。それだけにその調べは聴くもの皆を強く惹きつけた。特に、当家の立派な仏壇にオルゴールを置いて、シューベルトの“ます”をお聴かせいただいた時、仏壇による音の反射がさらに加わって言い知れぬ温もりをもったさわやかな音楽となり、私たちの耳に届けられた。

当日はオルゴールばかりではなく、音程を厚紙に穴をあけてプログラムし、その穴から空気を送りこんで音を出す仕掛けの珍しい小型パイプ・オルガンを紹介され、畑田先生みずからの演奏によるオルガンの調べを鑑賞することができた。

最後に、当地ご出身で関西二期会の名ソプラノ歌手 畑田弘美さんの美しい歌声とオルガンの伴奏にリードされ、参加者全員が日本の歌曲「ふるさと」を高らかに合唱して会は閉じられた。畑田家庄屋ホールでのオルゴールの余韻を胸に留めつつ家路についた。(大阪大学名誉教授 園田 昇)

畑田家の学習会やフォーラムは幅広い内容で興味深いものが多く、いつも楽しく学ばせて頂いております。畑田先生の幅広い知識にはいつも感心させられていますが、先生の人間的な魅力に惹き込まれて参加する人も多いのではないのでしょうか。化学の研究・教育のかたわらオルゴールにも造詣が深く、小さなオルゴールをいつも持ち歩いておられて、私も聞かせて頂いたことがあります。

今回は、畑田先生自らのお話で、オルゴールの音の成り立ちや、人の心を落ち着かせるなど森林浴と同じ効果があることなどを教えて頂きました。また、いろいろなオルゴールを目の前で演奏していただき、楽しい一時を過ごすことが出来ました。オルゴールそのものも素晴らしいのですが、木のぬくもりを感じられる古い家屋が持つ広がりの中で聞くことができ、より一層心地よく聞くことができたように思います。先

生のお母様がオルゴールがお好きだったとか、お母様からの影響も大きいように思いました。(放送大生 大脇玲子)

小さい頃からのオルゴール曲の定番といえば「乙女の祈り」、「エリーゼのために」、「ゆりかごの歌」などを思い出しますが、今回、畑田家で聞いたオルゴールは、これらとは一味違う曲が多かったのが印象的でした。オルゴールには「女の子」に送る贈り物のイメージを抱いていましたが、畑田先生のコレクションと知って少々驚いています。共鳴する箱がとても重要であること、日本家屋がオルゴールに良く合うことも新たな発見でした。オルゴールは生の音が身近に聞けるという特徴を持ち、「心が癒される」ということですが、お仏壇をバックに演奏されるオルゴール、手回しのオルゴールなど今までにない、不思議な体験でした。もう一度聞きたいな。

(八尾ニューモラル生涯学習クラブ 木村千代子)

オルゴールは木が命というお話がとても印象に残りました。空気の振動を板に伝えるので 板は古く固いほどよい音を奏でるとのこと、100年くらい置いた木が、水分が抜け強くてよいものができる、などと教えて頂き、長い年月と人々の智慧がつくりあげてきたオルゴールにますます興味がわきました。また、オルゴールの機械の説明とともに、そのメロディーは森林浴と同じ効果があり、人びとに安らぎと癒しを与え、人の幸せに役立っているとお話があり、畑田先生がいかにオルゴールを愛しておられるかがひしひしと伝わってきました。世界に一つのオルゴール すばらしかったです。まだまだ秘密がありそうで楽しみにしています。有難うございました。

(八尾ニューモラル生涯学習クラブ 神野和子)

耳を疑い、目を疑う春の一日でした。このようなオルゴールが世の中にあったのか。オルゴールとはこれほどまでに安らぎをもたらすものだったのか。正直言って、「オルゴールの起源は14世紀末にベルギーの教会の時計塔で時を告げた鐘の音に遡る」と、学生時代に何かの書物の中で読んだ遠い記憶があるだけで、これまでオルゴールについてはあまり深い関心ももたず、謙虚に聴き入ることもなかった無頼の私には、大袈裟ですが驚愕の一言に尽きるこの度の出会いでした。

さながら、神さまのみ心のままに、時空を超えたその懐の中を恍惚と漂っているような自分に驚きました。この日拝聴したオルゴールのそれぞれが持つ個性は、音楽に堪能なお方であれば、様々な印象や感慨でお受け止めになったでしょう。私に限って言えば、最初から最後まで一貫して私の心を捉えて放さなかったのは「一途に清澄な音の佇まい」とも言うべき情趣でした。130年の風雪に耐えてきた、伝承文化の貴重な語り部である畑田家住宅の、檜と土壁で造られた大らかな箱の中で、さながら弾性率の極めて高いスピーカーコーンに包まれたかのように、凜然たる響きをオルゴールは届けてくれました。あるときには優しさも、またあるときには温もりも、傾聴する連衆に届けてくれました。きっと木の和みが醸し出す効果なのでしょう。そうです。凜然と、優しく、温かく。幾度も、その響きを確かめながら帰路につきました。オルゴールはいいな。実にいい。響きが深いな。懐が深いな。と呟きながら。ふと、「分け入っても 分け入っても 青い山

(種田山頭火)」の句が脳裏をよぎりました。

(姫路工業大学名誉教授 三軒 齊)

無料の出前オルゴールコンサートをボランティアとして展開しています。小生がこの活動を始めたきっかけは、13年前女房に先立たれたことです。2年ほどは落ち込んで、どんな生活をしていたのかよく覚えていない状況でしたが、再起するには、持続性のある活動で、自分が楽しく、相手も楽しい、そして女房が喜んでくれるものは何か、で思いついたのがこの活動でした。始めて10年になりますが、搬送はほとんど息子が担当してくれ、年間15~20回ぐらいのコンサート、府下は勿論、他県へも出かけ、現在は、市の社会福祉協会と勤め先だったNTTのボランティアグループに登録しています。

さて、今回のコンサートに参加して感じた私のコンサートとの「違い」ですが、お聴きになっている方々が、静かで熱心だったからかも知れませんが、ボックスタイプのシリンダーオルゴールが、共鳴箱だけであんな良い音に聴こえたのは意外でした。百年を越える日本家屋が大きな一つの共鳴箱になっていたのかとも思いますが、今まで畳の上は響きがよくないと思いついて避けてきた私には、「目から鱗」でした。

お話の内容が私と全く違いました。小生もオルゴールの歴史や音が出る仕組み、機構などを話しますが、先生のは、科学者としての細かい、しかも、様々な角度からのお話で、十分な説得力と驚きがありました。小生は、「曲」にまつわるエピソードをよく話に使いますが、音の良さを具体的に話すことも大事な、とあらためて実感いたしました。

この種のコンサートは、聴いておられる方々と演奏者との距離が近いために、演奏者の態度が直接そのコンサートの雰囲気になってしまうのですが、今回のコンサートを拝聴して、先生がオルゴールそのものを愛し、奏でられる「生の音」を楽しみ、大切にされている様子が良く分かりました。

手回しオルガンの演奏はいつも曲が終わったときに拍手が起こります。これはシリンダーやディスクオルゴールのときには無いことで、矢張り「人が演奏する」という行為を、聴衆が実感として受けとめておられるからだと思えます。

最近、いろいろな手回しオルガンを弾き比べて思うのですが、シリンダーやディスクオルゴールと違って、限られてはいますが、ハンドルの廻し方にスピードの変化やリズム、強弱を付けることで、曲の表情を変えることが可能ですし、それが楽器としての演奏だと思うのです。小生の問いに、ある人が「歌いながら演奏したら・・・」と答えてくれました。

最近、小生は、ブックに演奏上のいろいろな記号を書き込んでいますが、タイミングがずれると曲を壊してしまうこともあり、なかなか巧く行きません。手回しオルガンの演奏は、つまるところ曲の中身をよく理解し、十分練習する必要があるのだと思っています。(羽曳野市 中西 明)

深みのある色の、幅広い梁が印象的な伝統的四間取りのお座敷で静かにオルゴールの音に耳を傾けました。懐かしい、やさしいその響き、和らぎ心を解きほぐす音色、とてもいとおしく感じつつ聞き入っておりました。一方、畑田家にしかない世界唯一のユニークなオルゴール、そして手回しパイプ

オルガンの見事な演奏、大阪大学名誉教授畑田耕一先生の分かりやすく親しみのあるお話からは 深い知識とともに、それぞれの品を如何にいつくしみ、大切にされて来たかが自然に伝えられ、とても心豊かなひと時を過ごさせていただきました。(難波聡子)

第9回畑田塾(2007年5月13日)

立体視のお話は、実例をあげ、映像も使って上手に説明して頂いたので、難しい内容ながら何とか理解できました。また、とても不思議に思いました。今後いろんな分野で応用出来そうです。学校の授業では、平面の黒板に文字や図を書いた説明ですが、立体視を使うと理解が速いのではないかと、質問したところ、授業は考えながらじっくり受けることが大切だから立体視は使わない方がよいと畑田先生がおっしゃり、それはそうだと思います。講演を今後の勉強に生かしていくつもりです。(大学生 富永大介)

6cm余りしか離れていない両眼を使って事物や風景を視ることにより立体視出来る。なるほどと思うが、今まで意識せず奥行きも視ていたのだ。不幸にして片方の眼の視力を失うことがあるとしたら、脳がそれを補うことをするのだろうか。今テレビの風林火山の山本勘助を視るたびに思う。大変面白く、色々考えさせられた講演であって、今後、多方面へ立体視が応用されることを期待したい。(緒方淳子)

西垣敬子さんは1994年アフガニスタンを訪れて以来、毎年現地に入りその場に必要な支援をされて来た。援助はじかに現地でなければ、途中で消えてしまうことがあると聞いていたので、現地の人と交流しながら援助を続けておられる様子を聞いて、安心した。実際、隠れ学校の女生徒やベールをとった女性達の写真を見て、これは現地に入った女性でなければ撮れなかったのだと実感した。赤いけしが一面に咲いている風景の写真は、のどかで美しい自然の広がりが見えるが、実は麻薬製造のためのものであり、それをタリバンが自分たちの活動の資金源にしている。国が取り締まっても、厳しい自然と生きる為の手段として、農民が他の農作物より収入もよく乾燥に強いけしの栽培に頼ってしまうという。どうしようもない現実ともどかしさを感じた。まだまだ難題が山積しているアフガニスタンであるが、少しでも人々が普通に生活できるよう活動されているのに感動した。

立体視の話を書かれた西田先生は、宝塚の自然の中で生まれ、子供の頃は色々工夫しながら、昆虫を捕らえるのに夢中になっておられたという。技術の開発はそういう所から生まれるのだと納得できた。興味のある事であれば子供はそれに熱中し、頭の中で考えて、糸口を見出すよう努力するのだと思う。人間の目の構造を知ることにより、三次元の世界をどのように二次元の世界に表現するか、立体感や臨場感を得るための技術が生み出されて来たことが分かった。錯視やだまし絵、一つの面に二つの画面が現れる絵など色々な例を実際にみせて頂き、目が如何に反応しているか、人間の目の不思議さを感じた。(大阪狭山市 中村恵美子)

教育フォーラム(2007年7月22日)

雑誌で阿久悠さんが「あの人は、金儲けは下手だが立派な

人です」という言葉が近年死語になったと語っているのを思い出した。確かに子供の頃よく耳にした会話だ。「お金が大切」は同時にそれ以上に大切なものがあることが前提である。最近、全てをお金や数字で解決することを、しがらみから解き放たれたように錯覚している。「交通事故では謝らない」を、うまく生きる方策とし、保険屋がお金で解決することを当たり前と思うようになった。皆が頑張っているわりには空しい社会を作ってしまった。これらを解決するために、教育は一体どこに向えばよいのか。そのヒントがここ畑田家にあるように思う。2年程前から、時間が許せば友人を誘って参加したいと思う畑田塾、その魅力は何か。畑田家にいると、古い建物が、そのままゆりかごであり、遠い祖先のことにまで想いが至る。つまり、素直な気持ちになり懐かしい気持ちでほっとする。これが、生きる力、心の元気につながる。また、横のつながりに加えて、縦のつながりを意識する場となり、長い時間軸でものを考えられる。広い立場でものを考える入り口となる。教育の基本がこの2点にあるといっても過言ではないと思う。そこで具体的に目標としたいことがある。日頃展開している生涯学習活動の拠点として地域にある古い建物、歴史的建物を活用することである。畑田家はまさにその役割を果たしているのである。人の心に元気を与えている。

(八尾ニューモラル生涯学習クラブ 神野武男)

日本建築と音の響き(2007年11月18日)

畑田家フォーラム参加は、2年目になります。これまで畑田家住宅での音楽会を通して、日本建築固有の響きを感じてきましたが、今回はその仕組みを学ぶことが出来ました。

音楽を、造りの違うコンサートホールで聞くと、異なった音で聞こえる原因が反響にある。その一例が、日本の能を西洋式のコンサートホールで聞くと全く違う音として聞こえることである。能を構成する日本語の発音と囃子の音は反響を必要としない性質なので、構造上反響しない日本建築では素直な音として聞こえてくる。一方、日本建築で西洋の音楽を演奏しても、余分な反響がないので美しい音として聞こえてくる。音の面で日本建築には、異文化の音でもうまく調和することが理解できた。

(岐阜県 浅野育洋)

羽曳野という意味ありげな地名に魅かれているのと畑田先生の清々しいお人柄に憧れて塾に寄せて頂いております。学校という多忙を極め、雑多な職場で神経をすり減らす毎日ですが、塾の帰路はさわやかで、充実感に満ちています。

音の響き合いの具体的で率直な楽しいお話の合間に聞かせていただいた美しい歌声は秋の実りのお庭に清らかに響き合い、私はいやされていました。一日一日を大切にしたい気持ちでいっぱいとなるのです。

(大阪市北区 小笠原絹江)

太い柱と土壁を持つ伝統的な木造住宅を会場にしたミニコンサート、それを受けての「日本建築と音の響き」のお話を楽しみました。ミニコンサートでは、管楽器のフルート(北野さん)、クラリネット(門さん)、オーボエ(小林さん)奏者がそれぞれの楽器の説明と音色の紹介をした後、バイオリン(比奈本さん)を含めて小曲を演奏してくださった。すぐ近くでの生演奏の柔らかい音色、独唱曲(畑田さん)の「私

のお父さん」にとってもゆったりした気分させられた。特に、この独唱曲は私が大好きな曲の一つだったので本当に嬉しい気分になりました。管楽器の構造の違いを知らなかったので、リードが一枚と二枚の違いなどなど、興味津々でした。狭い日本間のぎゅうぎゅう詰め参加者の中での演奏は楽器の方々は無論のこと、声楽の畑田さんは苦勞されたことと思う。頭の上の棚が声の響きに影響するとのこと、さすがプロと感心した。あとで、中庭に出て唄われた時はとても気持ちよくのびのび歌われたことでしょう。

高橋先生の「日本建築と音の響き」の講演は、音の物理的説明を含め、管楽器の音色の違いや母音「あ」「い」「う」の違いをスクリーン上で視覚に訴えて、丁寧に説明されることから始まった。それに続いて、世界の音楽ホールの構造と演奏の響きの違いをCDで聞かせて下さるとともに、波動として示された。本当によくわかった。日本家屋内での音楽演奏には直接触れられなかったが、木と土壁という、音に取って柔らかい材料の中では、反射波の周波数特性が柔らかくなると思われるので、響きはとてもマイルドなものになるだろう。是非ともコンクリート造りと木造の建物内での響きの分析をお願いしたいと思う。

(恵我ノ荘 小寺悦子)

伝統的木造住宅の畑田家でアンサンブル演奏をさせていただきました。編成は、フルート、クラリネット、オーボエ、という木管三重奏です。ダイニングと8畳の和室居間の境目で、居間を通してお庭を眺めつつ演奏いたしました。いつも通りに音を出していたわけですが、高音の響きがいつもより柔らかく、3本の楽器で和音を出しても同じく柔らかい響きになりました。現在のホールで同じ音を出すと鋭利な氷柱のように感じるだろうと、演奏しながら思いました。

最初はこの「響きの柔らかさ」が不思議で、「なんで?なんで?」という思いが頭の中に溢れていましたが、高橋先生、畑田先生のお話を伺っているうちに、少しずつ解ってきました。高橋先生の、カーネギーホール、教会やスタジオでの録音を比較した残響と会場の関係の、オッシロスコープでの視覚的観察を含めたお話は、特に興味深かったです。私達それぞれの楽器の音の響きや波形の違いも見せて頂きました。このような「体感型の授業」を受けることができて、とても嬉しかったです。これからも参加したいと思います。

(オーボエ 小林千晃)



畑田家フォーラムの独自性

大阪科学館館長・大阪大学名誉教授 高橋 恵明



畑田家の登録有形文化財は単に文化財として保存されているだけではなく、長年に亘って、知の修養のために利用するという独自の着想を展開し、発展させる基地となっている。この家の活用・保存に関し多くの企画を実行される畑田勇会長はじめ役員の方々の並々ならぬご努力と熱意に深く感動する次第である。畑田家当主の畑田耕一先生は大阪大学の副学長のご多忙の中でも研究と教育に邁進された先生である。また、文化財は活用するためにあるとの発想から畑田塾、フォーラム始め活用・保存の事業の数々を軌道に乗せられた。年報に記載されている事業報告も年々充実の度合いを深めていることは誠に素晴らしい。

そればかりでなく、講座などに参加される方々が熱心に学び、知を創り出そうとされる態度がひしひしと感じられるあの世界はどう表現したら良いのだろうか。当家で開催される数々の講座は講師が専門分野に囚われず、新しい知を模索し、提示して、聴講の方々とともに考え、磨き上げる場であることを目的とすると聞いている。普通にある講座等とは随分雰囲気異なる集まりである。まさにフォーラムの名が相応しい。

我が国では習うことは、永らく、知の伝承であった。勿論一流の研究大学では、伝承の上に創造をすることが目的となっていることは言うまでもないが、多くのいわゆる高等教育機関でも学習における創造はまだまだの感がしないわけではない。特に、中等教育ではまだ、習熟のみに重きが置かれているように思えてならない。我が国は世界有数の教育国として、教育に多大の努力と資力をつぎ込んでいる国である。何のために教育があるのか、何のために教育を受けるのかの問いかけがあるべきこと、また、問いかけに対する答えが、教育を受ける側にも用意されているべきことが、どれだけ国民に伝えられているのであろうか。

畑田家の講座に臨むとき、参加者が眼前の問題だけを興味とするだけではなく、幅広い興味をもとに講座に参加されていることが伝わってくる気がする。一連の講座が、広く我が国の教育者や受益者に自分の来し方、行く末を考えるきっかけを与えるものと信じている。畑田家のフォーラムの精神が拡がって行くことを切望するとともに、フォーラムに参加し、話題を提供し、楽しませて頂いた一人として心からお礼を申し上げます。

平成19年度 会計報告(予定)

収入の部

繰越金 100,865 円(前年度繰越金)
会費 655,500 円(315 口)
寄付金 50,000 円
雑収入 17,730 円(絵葉書、しおり)
合計 824,095 円

支出の部

講師謝礼 336,500 円
アルバイト料 37,000 円
資料作成、印刷費 324,545 円(資料、年報、出版)
通信費 20,510 円(郵送料、手数料)
事務費 15,087 円(事務用品)
雑費 42,673 円(講師接待、他)
繰越金 47,780 円(次年度繰越金)
合計 824,095 円

あしがき 昨春、会長の畑田勇さんが長年にわたる学校教育と社会教育への貢献により瑞宝小受章を受賞されました。当会が羽曳野市の市民公益活動団体に登録されたことに伴い、年度替わりが4月1日になり、2007年度は1月1日より2008年3月31日までとなりました。会計報告は年度末までの予定を掲載していますが、正式な報告は2008年度の年報で行います。

今年度も様々な行事が開かれ、皆様の積極的なご参加とご発言をいただき有難うございました。当会のますますの発展のため今後ともより一層のお力添えをお願い申し上げます。(S.N)

事務局 〒583-0874 大阪府羽曳野市郡戸1-1 畑田 勇 電話072-955-4380

会費の納入は郵便振替(口座番号00980-2-41107 加入者名:畑田家住宅活用保存会)へお願いします。

役員	
会長	畑田 勇
副会長	甲斐 学、中村貞夫、畑田拓男
事務局長	畑田耕一
幹事	石井智子、織川久子、笠井敏光、畑田弘美、矢野富美子
会計	畑田庸雄
会計監査	澤田秀雄、塚本昭光